

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

正直な話、このところ私が抱え込んでいる悩みは、主観的にはかなり深刻なのだけれども、それを人にわかってもらいうのがなかなか難しい。わかってもらいたいなどという甘えは、もうさらさらなくて、ただ、人というよりはむしろ自分に、納得のいくような明確な輪郭を描き出したいというだけなのだが、言

おうとすると途端に、ことは薄っぺらで不真面目な顔になってしまう。それはまるで、あの奇妙な夢の中での心持ちにそっくりじゃないかと、ある日不意に、二十歳の頃に見た夢を思い出した。

その夢というのはこうだった。無意味な念押しかもしれないけれど、これから言うことのなかで、少くともこの夢の細部だけは、嘘いつわりのない真実である。

私はボートに乗って、湖のまんなかに出ていた。あたりは夕方か嵐の前のように陽が陰って、そのために湖水が底の方まで良く透き通って見えた。これほどに透明度の高い水は、ほとんど類が無いと言う。そのことを確かめるために、私は十円玉を水の中に落としてみる。私が乗っているボートは最も単純な造りのものだが、腰かけている幅二十センチほどの板の下は舟底がまったくなくて、だから私は坐ったままの上体を少しかがめると、眼下に真っ直ぐ藍色に沈んだ水が果てしなく深まっているのを見ることができた。坐っている板の脇のところに、十円玉を小さな塔のように積み上げて

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

おいて、それを一つずつ落として行く。初めの十円玉はどんどん落ちて行くき、小さくなっていくけれども、かたちははっきり見極めることができるし、その動きが乱れることもない。おそらく湖の中は水面よりもお静かなのだらう。しばらくして次の十円玉を落とす。これもまた初めの十円玉と同じように落ちていく。先の十円玉に比べればずいぶん大きく、模様までも見える位だが、だからと言って先の十円玉が見えにくくなったというわけではない。相変らずはつきりと見えている。見えながら、どんどん落ちて行く。もう一つ、十円玉を落としてみる。これも同じことである。もう一つ、また一つ、私は次々に十円玉を落としていった。十円玉は互いに遠く離れていくのに、しかし連なり合って、それぞれが激しいスピードで落ちて行くのである。そして、もうずいぶんたくさん十円玉を落としたのに、それでも初めの十円玉は、まだはつきりとそのかたちを留めているのであった。なんと水が澄んでいることだらう。それになんと深いことだらう。私は魂が吸い込まれるような思いで湖水を覗き込み、相変らず次々と十円玉を落としながら、その一方で、微かな舟の揺れのせいで脇に積んである十円玉の塔が崩れはしない

か、小さな波にさらわれはしないかと心配で、こんなにたくさん十円玉、ああもつたいない、などと思いつつ、それでいて舟底の無いことは不思議とも何とも思っていないのであった。

この夢は、それこそ一晩中見続けていたのではないかと思われるような長い長い夢の一部分で、その夢全体は、山あり谷あり湖ありの遠征もしくはハイキングといったものだった。

目が覚めて一日か二日の後には、その大方の部分は濃い霧に包まれたように見分け難くなってしまったのだけれども、確かあの湖上の遊びの前だから後だかに、丘をよじ登る場面があったことは覚えている。

その丘というのが、当時通っていた大学の、キャンパスの中央を通っている並木の脇のスロープで、体力の充実している日や授業に遅れた時などに近道をするために駆け上れば、少々弾みをつけて数歩で充分という、ただの斜面だった。そこを私は本式の登山のような重装備で、あえぎながら四つんばいになって登っているのだが、そうしながらも場所柄に対する認識だけはし

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

っかりしていて、なんでこんな所をこんな思いをして登らなけりやならないんだあと、馬鹿ばかりに耐えられない。その一方で、これは何が何でもこうする他ないのだという極度の諦念とも覚悟ともつかないものもあって、前述の湖上の場面と同様、ひどく日常的でありふれたものと、ひどく非論理的でありえないことが（というのも私はこれまで登山靴など履いたこともない人間だから）、ぴたっと貼り合わさっている点が印象的だったが、これは多分、夢一般について言えることなのだろう。

ついでに言えば湖上の遊びにも続きがあつて、ボートが岸に近づくにつれて、湖の中央ではあんなにも静かだった水面に波が立ち始め、残り一メートルというところでは舟縁にしがみつかなければならないような大揺れになった。水は澄んでいるどころか、黄色がかった青みどろに湧き立っている。岸に登ろうにも、手がかり足がかりにするものが何もなくて、ええい、たかだか数十センチのこと、跳んでしまえ！ ひと思いに跳んだところが、あいだの逆巻く波のただなかに、ものの見事に落っこちた。水はそんなに深いとも思われないが、なにしろ波が荒くて手も足も立たない。全身ずぶぬれで四肢を

めちやくちやにじたばたさせながら、私は舌打ちするような気分で、ちよつと気を許すともうこういうことになるのだから、良く良く注意しなくては、と反省などしているのであつた。

この夢を見た時の私が意識の深層でいったい何を考えていたのか、それは見た当座も明確ではなかったし、今となつてはなおのこと見当のつけようもないのだけれども、しかし夢というのは神話に似て、こじつければそれなりの筋が通る。そこでたとえばこの夢を、その当時の私がフランス文学に対して持っていた印象を表わしているのだと解釈してみても、奇妙なことに、それはそれなりの辻褄が合うのである。

たとえば、十円玉を投げ入れながら覗き見た澄んだ湖水のその深さとは、その頃私が新鮮な驚きに心の眼を見開いて読んだ幾つかの文学作品に感じたものとはほぼ同質だと、言つて言えないことはない。ブルーストとかネルヴァルはもちろんのこと、その時期の私は読む本のいずれにも、こうした印象を

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

持っていたような気がする。それを私は稚い頭でフランス文学の特質であるように思っていた。

もちろん私が本当にフランス文学の特質を正しく捉えていたかと言えば、それは大いにあやしいので、実際に私が感じていたものは、フランス文学を道具として掘り下げつつあった自分の内面にすぎなかったとも考えられる。覗き込む姿勢を取っていたのもそのためで、だからこそあのようにも単純で落下するのみの深みであったのに違いない。今の私はと言えば、フランスの文学作品のひとつひとつに遥かに多様なものを見ているし、何よりも私自身ときたら、身の諸事万端ひっくるめて、何が何だか訳がわからなくなっているという意味で、まことにもって複雑怪奇なことこの上もない。

いずれにもせよ主体と客体を混同するのは青年期の特徴で、それ故にこそ若い日の愛読書と恋人は精神形成に大きな意味を持つばかりでなく、年とってから、その絶対的な価値に対する盲信を捨て難い。

件の夢に話を戻せば、湖上のひとときは、そのとき決して不快なものとは思われなかった。湖の底の、どこからともない微かな光は、明らかに未知な

る可能性の色合いを持っていた。手を伸ばして掴むことはできないが、しかしそこにあることは確かなもの、そしてどんどん見えてきて、どこまでも見えてくるはずのものが、そこにはあった。

では実際にそれが見えてきたかどうか、過ぎた現実の年月と現在のわが身を振り返れば、これといって見えたものはなかったとしか言い方がない。見えなくなったというよりは、他のことに気をとられて眼を転じたという方が正しいような気もする。夢の中ですでに予感したように、人生の波が、まことに小さなスケールながら大荒れに荒れて、ものを見通すどころの騒ぎではなくなった。

それがある日不意にあの夢を思い出したというのは、どうしたことだったのだろう。つまらない雑談のはずみだったけれども、すっかり忘れていたものを出すについて、そこに何か必然的なものが作用していたかどうか、それはわからない。わかるのは、思い出したら当然のようにしてその当時が甦ってきた、そして併せて現在を省みる気になった、ということだ。

よまいごと ことばの狭間 ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

思い出した昔の夢は、確かに二十年前の私を呼び戻してくれたが、同時に現在の私の心境にもびたりと当て嵌まった。底無しの水に落ちていくのがよほど性に合っているのだろう。今でもこれと寸分変りやしない、私はそう思っただけ、半ば懐しく半ばあきれた。ただ、梓組は当て嵌まるのだが、そこでの感じ方には大きな開きがあった。まるで現在まさしくそうであるという程の実感とともに、私は底の抜けた舟の中に坐って十円玉を投げ入れている自分を想定することができても、そのようにしている現在の私は、初めて夢の中にいた私とはまったく異なる心持ちでいるのである。

かつて私の心を浸していたのは、言いようのない魅惑であつた。透明な水と、その奥から漂ってくる微かな光に、私は強く幻惑されていたのみならず、舟に底が無いこと自体に胸躍る思いをしていた。底が無くてもしっかり身を支えることができて、それ故に湖水を見透すことができるのは、この上もなく自由で、まさしく特権的な快感だった。

だが今はそうではない。舟底が無いということに、私は強い不安を抱かずにいられない。そしてそればかりが気になって、そこにあるはずの透明な湖

水をも、心落ちつけて覗き込むことができないのである。私の存在を規定しているのは今、見透すことができないという不安、そして私の眼を塞いでいるのは、そこに存在しない一枚の舟底である。

それにしても、この舟底とは私にとっていったい何なのだろうか。存在しない舟底に怯える私としては、自らにそう問いかける他になすべがない。だから、この文章を書くこともまた、その問いかけのひとつのかたちに他ならないのである。

舟底というのは水上にあつて自分を支えてくれるはずのものだから、人生のどの局面を捉えてもそれなりの舟底を考えることはできるのだろうけれど、今この夢を文学的状况としてのみ解釈するとすれば、存在しない舟底とは、おそらく言語そのものだ。言語を奪われた状態をこの夢は示しているのではあるまいか、度重なる自問自答の果てに私はこう結論を出し、その結論に改めて暗潜とした。

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

いまさら何を言うかと笑われそうだが、外国の文学を学ぼうなどとは、我ながら何と大胆な決心をしたものかと、最近になって驚いている。近代のものの見方に立って言うならば、文学とは個人の内奥から自発的に発することばのことで、従ってことばと精神との絡み合いはきわめて深い。それを、ほとんど精神形成の道具でもあればまた結果でもあるような母国語という言葉と離れて、成長した後には修得する別の言語で、概容すら定かではない文学を学ぼうというのである。しかも、その文学を作り出した風土についても、習慣についてもほとんど無知に等しい状態で一切を始めるのだから、その孤児性たるや当節の中国残留孤児よりもなお深刻かもしれない。

こんなことは、ふつう外国文学を学ぼうとする人は良く考えてから自分の進路を定めるものなのだろうか。私はといえば、まことに迂闊なことに、こうしたことに深く思い到ったのはごく最近のことだった。

しかしまあ、選んでしまったものは仕方がない。眼の前には確かに道があった。学ぶべきものは測り知れない。なにしろ知識を掘り出す前に、道具から作らなければならないのである。とても脇見をしたり考えごとをしたりし

ている暇はない。何ごとによらず、学習というのはいつもそんなものではあらうけれども。

その結果、何が身についたか。たとえば言語面で、どれほどの能力が備わっただろうか。私は人も知る不勉強な人間で、だから私の例を持ち出すことは大いに公正を欠くおそれがあるのだが、さりとて他人の言語的能力というのは実に実に測定し難いものなので、仕方ない、ひとつの劣悪なサンプルとして自分を例にとるとすれば、学んで、確かにある程度のもは身についた。

とは言うものの、それはまさしく無いよりはましという程の微々たるもので、感受能力も表出能力も、客観的にはまことに乏しい。ところが、微々たるものには稀少価値というものがあって、微々たるものであるが故にかえって強く存在を主張する。そこで、こじつけを承知の上で主観的な言い方をすると、私が学んだ僅かなフランス語は、単語であれ言い回しであれ、僅かなものが大きな輝きを放って、それはちょうど澄んだ湖水にコインを落としてその行くえを見送るがごとく、まことに些細ではありながら、広大な湖の全

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

存在意義をその一点に集約せしめる程のものにもなるのである。

しかし、いかに宝石の如き存在を主張したとしても、そのように僅かなものをもってしては、それを素材とする文学は構成することができない。せいぜいが、ペンダントやブローチ程度のアクセサリー、つまり付随的なものの、そのまた付随的なものとしてしか使い道はないのである。

フランスの文学を学んでいるつもりが、それは如何にも手の届かぬもので実は少々いびつな日本の文学を学んでいたのではなかったか。これがある日私の胸に、一点の雲のように立ち現われ、ムクムクと大きくなっていった疑いだった。

日本人たる私は日本の風土に日本語で育ったのだから、専ら日本の文学に関わるのが当然だ、もし疑いもなくそう思い直すことができるのなら問題はない。そう思うことができたなら、帰宅した放蕩息子よりもなお倅せであるだろう。しかし少くとも私には、それはできそうにない。聖書のなかでも優れて物語性の強いあの喻え話を初めて読んだ時から、私の胸に、父の家に迎えられたのち、あの息子ははたして本当に倅せだったのか、熱狂を捨て自己卑

下の中に色褪せた生を終えたのではないかという、誰にも言えない疑念があって、そのために帰宅が不可能だというばかりではない。それだけではなく、私には帰る家が無かったからである。なぜなら、私が学んだ文学は日本の風土を想定したものではなく、故にそこに安住することのできないものだったからである。

いかに文学が人間の内奥から発するものだと言っても、知的文化の所産である以上、その道に通ずるためにはある程度の修練が必要である。いや、ある程度どころではない、かなりの知識と経験を積まなければならない。日本人なら自然に日本の文学が理解できるなどというのは大まちがいで、文学が文学として成立するためには、良くも悪くもそれに関わる人間のあいだに無数の取り決め、約束を必要とする。私がそのことを理解するようになったのはかなり遅くて、奇妙なことに、あるいは当然のことに、フランス文学における自分の無能を思い知るのと時期を同じくしていた。つまり、フランスの文学を学んでいるつもりでいた期間に私が実際にしていたことはと言えば、

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

日本の文学において自分自身を異邦人化するという、ただそれだけのことで
はなかったのか、ある時ふとそんな気がしたのだった。

たとえば私は、フランス人としてフランスの文学をどうしようと思っ
たことは一度もなかった。フランス人のように考えようとしたこと、フラン
ス人のものの見方をしようとしたことはあるけれども、それは自分を別の既
成の枠に嵌めるというのに近くて、その先の自主的で自由な心の動きを意味
するものではまっただくなかった。それならば、フランスの文学に関わってい
るときに、日本人としての自意識や判断力が働いているかと言えば、これは
もう皆無に等しい。

そのくせ、日本の文学を客観的に捉えようとする、私の頭の中にむっく
りと起き上るのはフランス文学のイメージである。フランスの文学に接して
いる時にはあまり助けにも邪魔にもならないフランスの文学像が、日本の文
学に對している時の私には、とても気になる道具ともなれば障害ともなるよ
うに思うのである。いったい私は、どこに自分の立脚地を持ち、何に眼を向
けているのだろうか。

立脚地などどこにも無い、と云うべきなのだろう。フランス文学であれ日
本文学であれ、いざれたいした力量のない人間にできることは、既にそこ
にある所産に身を委ねること、そして理解しえた僅少のものに満足すること
しかない。それは重々わかっているのだけれど、しかし自分の依って立つ
べき土台が失われたと感ずる不安もまたどうしようもないもので、土台など
あってもなくても自分は自分なのだからいいじゃないかと言えるのは強いお
方、そうなるためには、今のこの話とはレベルを異にしたよほど強い足の踏
んばりが必要なのではないかと思う。

不安と自暴自棄のついでに、自分が失ったもの、あるいは得るべくして得
られなかったものを次々言いつのるとすれば、まずはフランス語、日本の小
説のイメージ、それから他でもない日本語といったところだろうか。日本語
もフランス語も失われたなかで、フランスの小説のイメージだけが多少とも
輪郭をとどめているのは奇妙なことだが、しかしこのフランス小説のイメー
ジというのが、「小説にとって肝腎なのは、現実の人間社会を忠実に描き出す

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

ことでもなければ、主義主張を顕揚することでもない。また伝統的な技法や観念の上にあぐらをかくことなく、作家に固有の文体を道具として自らの内面世界を掘り下げていくことだ」という、ブルースト流に混沌として無責任なものだから、何も無いというのと変らない心もとないものなのである。それに肝腎かなめの言語が、日本語フランス語ともに失われているような現実では、要するに一切が灰燼に帰したと言うのも決して大仰ではない。

フランス語の方はまだ良いでしょう。おとなになって習い始めたことではあるし、もともと私の能力ではたいした成果を期待できるはずのものではなかったのだと思えば、諦めはつく。しかし日本語は、いったいどういう訳で、どのように、私から失われていったのだろうか。考えてみれば納得のいかなることではないか。何と言っても、このことばで育ち、フランス語を学び始めてからも日常をこの言葉で暮らし、フランスの小説を読んだり、それについて考えたりすることさえも、ずいぶん多くを日本語で行ってきたのだから。日本語は今なお私にとって第一の、そしてほとんど唯一の言語であるはずだ。そればかりではない、フランス語を学んでいるその最中にも、私たちは日本

語のことを忘れることは許されなかった。私たちのフランス語の先生方は、繰り返し繰り返し、日本語をないがしろにするな、美しい日本語を書け、と言われた。あまり繰り返し言われたものだから、「耳にタコ」とばかりに聞き流したこともあれば、逆に、美しい日本語って何ですか？ フランス語よりそれを教えて下さい、そう言い返したい思いに駆られたこともあった程だ。

その挙句がこのでいたらくである。ひょっとすると私は、あまりに日本語、日本語と言われたために、かえって意識過剰になってしまったのだろうか。すべては私の思い過ぎなのだろうか。

そうならば良いのだけれど、しかしどうもそうとばかりも言い切れないような気がする。と言うのも、それに類することを他からも度々耳にすることがあるからだ。それらのことばを煎じ詰めると、要するに、翻訳であれオリジナルな文章であれ、フランス語を背景にした日本語はどうも読みづらく、解りにくい、ということであるように思われた。

たとえば近所の小説大好きという奥さんが、「でも外国の小説って、なんだ

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

か肩が凝るのよね。名前が片カナのせいかしら」と言った。教養課程の学生がレポートに、「翻訳小説は文章がやたら長くて分かりづらく、読む気になれなかった。もっとも、これまで読んだ日本の小説も、推薦図書とか、受験に必要とかで、仕方なく読んだものがほとんどナノダー」と書いて寄こした。もう少し上級の学生は、フランス文学史上に燦然と輝いている恋愛小説の、これまた屈指の名訳とされているものを読んで、「主人公の考え方に共感できない。もしかすると訳が悪いのだろうか」と述べた。そして、私がかんり信頼していたある知識人は、「フランス文学者の書くものは、へ：であるところの」と息か、（…でしかない）などという言い回しが多すぎて、これが日本語かしらと思ってしまう」と皮肉っぽい眼つきをした。それにまた私自身も、先輩諸氏の書かれるものが、やたら入り組んでいたり、私には未だ消化し切れない概念用語が頻出していたりで、わからないというよりは厭気がさして、途中で投げ出してしまったことも一度や二度ではない。というのもそういう文章は、読み進むうちに、論考の主題であつたはずの文学作品から浮かび上がる精神状態とは正反対の、一種好戦的な気分に駆り立てられたりするから

である。そういう私の書くものは、「内容空疎に加えて文章がひどい。日本語はもつと簡潔で美しいものです」と何度言われたことだろう。

これらの苦言はそれぞれに批判の対象を異にしているうえに、言われた状況も言っている人のレベルもまちまちだから、一概に論ずるのは無理かもしれない。それに最後の私に向けられたものは別として、どの文句も、それは言う方に問題があるのだと言って言えないことはない。笑って聞き流してしまえば済むことなのかもしれないが、しかしフランス文学に関わっている自分自身の底が抜けたようにで心細い折などには、そのどれもが鋭く胸に突きささるのも事実である。

これと逆に、「フランス語やフランス文学を勉強した人の書いたものだけに、この日本語には並々ならぬ深みと輝きがある」という言葉はあまり聞いたことがない。どうしてだろうか。言語が文化や思考の方法と切っても切れないものであるのなら、フランス語で触れた文化の光と、これを習得するために鍛練した知的能力とが、日本語という場においても現われないはずはないの

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

だから、そういう誉め言葉こそ、あつて然るべきだと思われるのに。

さてこそ、美しい日本語をものせよ、と我が恩師らの言われたことが今更ながら脳裡に甦るわけで、何はともあれ日本語によつて何かを伝達しようとしているときに、日本語がまずいことばかり言われてその内容が問題にならないのは、届きたい荷物があるのに車が故障しているようなものかもしれないから、誰が読んでもわかり易く、耳触りの良い日本語を書けというのは、まことにもつて重要かつ有益な教えであつたと、深く領かれるのである。

そう言えば私も、フランス文学の学生になる前はもちろんのこと、そのずっと後までも、翻訳小説の愛読者であつたわけだし、フランス以外の外国文学は今でも翻訳に頼る他ないのだから、訳文の読みやすき読みにくきがいかに重大な問題か、身をもつて知らないわけではない。フランス語が皆目わからなかった私から見ると、悪い翻訳は石ころだらけのでこぼこ道というような生易しいものではなくて、ただ減茶苦茶な活字の羅列に他ならなかった。逆に良い翻訳は、これがオリジナルに書かれたのでないとわかつていても、なおその中の何行かの文章が頭にこびりついて離れないような、そんな力を

持っていた。たとえば内藤濯による『星の王子さま』の訳文には原文を越えるほどの意味と迫力を持った箇所があつて、日本でのこの作品の薄っぺらな人気はまったく笑止だと思ひながらも、なお愛着を捨てることができないでいる。またブルーストを初めて翻訳で読んで強く印象に残った部分が、後に原文ではさほどに強烈でもなかったりして、ああこれは訳文の日本語にひつかかったのだつたかと、奇妙な小気味よさを味わつたこともある。

そんな特異な現象はそうそう起こることではないから別格としても、一般的には訳文はそれ自体として読みやすくわかりやすく、それが小説ならばなるべく多くの感動を与えるものであるに越したことはない。これだけは確かなことだ。

それはまさしく言うまでもないことで、百も承知の上であつたからこそ、フランス文学の翻訳をものした人々は、自身大いに努力する傍ら、弟子たちにも口を酸っぱくして説いてきかせたのに違ひない。

そして事実、さまざまな悪評にもかかわらず、立派な翻訳作品は次々と世

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

に生み出されてきたし、単に表面的な読みやすさということばかりでなく、原典に関する文学研究も備わっているとすれば、その訳文の日本語は原文よりもなお強く原文の意図を反映することだとは言えないのである。そんな高度の問題は別としても、ともかく翻訳という手段は、一般読者の立場からすればほとんど唯一の道なのだから、こんなに多くの仕事がなされ、しかもその大半が良き日本語を心がけていることが文章の端ばしから察せられるようなものであるとすれば、その上まだ文句を言うのは、これはもう高望み、無いものねだりというものではあるまいか。

にもかかわらず、その労作の氾濫を目のあたりにして、私の心には時として言いようもなく寂漠たる思いがたちこめることがある。問題を再度一般的な次元から私個人の感想のレベルにまで引き下げるとすれば、その悲哀はフランス語を背景としているほとんどすべての日本語に対して常に感ずるもので、翻訳であるとオリジナルな文章であるとを問わない。また名文であると拙劣な文章であるとを問わないから、この気持は現実はこの世に存在する誰彼の文章に対するものではなく、まったくもって私個人にのみ関わるもの、

言ってみれば私個人の内部にある日本語とフランス語という二つの言語のひずみから、あるいは二つの言語の乖離から生じたものに他ならない。もう少し言えば、この悲哀の気持だけが、ひどく不勉強でいながらそのくせ本心に徹底した不勉強にはなり切れずに来た私に、フランス文学という漠然たる総体が残した唯一のものであるように、少くとも今というこの時、思われてならないのだ。そしてその気持が、実に、湖上で底のないボートから銅貨を落とし続けるときの気持にそっくりなのである。

それでは現実にとどのような時にそうした気持を味わうのか、具体的な例を挙げるとすれば、たとえば見事にこなれた日本語になっている名訳を読んだりしているときに、奇妙にも悲しくなったりする。登場人物の中年男が如何にもそれらしい、いまにもその辺りから聞こえてきそうな会話をしたりしている、感心する一方で、しかしこれは如何にも日本人の日本語によるものの言い方だなという気がして、何となく鼻白んでしまうのである。つま

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

り、そのようにも立派に日本語になり切ったものからは、フランス人たる主人公のイメージは浮かんでこないのだ。もしも私が、片カナの名前にも躰くほどフランスの事物に無知であったなら、こんなふうな奇妙な空虚感はずに済んだのかもしれないのだが。

それにそういう出来上った日本語は、当然ながら少々古めかしい。きわめて日常的に使われている言い回しでも元をただせば仏教用語などという場合も少くはないから、なるほど苦心の名訳だなあと感嘆するそばから、言い回しばかりが空転して、古壁のようにはがれ落ちてしまったりする。総じて凝りすぎた文章というのは厭味なものだけれども、腕達者に過ぎて得意満面のいわゆる名訳ほど気色の悪いものはない。文句の言いついでに言いたい放題言わせてもらえば、いったいに翻訳に登場する女のことばは、特に語尾が女らしすぎ、男は男らしすぎなのではないか。ふつう、男も女もそんなに男っぽく、あるいは女っぽくしゃべってはいない。

それくらいなら生硬でいままお直訳の域を脱しきれてない日本語の方がまだましだと思ふことがある。実際には、こういう訳文が最も世評の槍玉に上

ることが多いのだろうし、事実日本語としてのみ判断すれば、読むに耐えない代物なのだろう。けれども、そういう原文から脱出し切れていない訳文を見て、ある種の親しみのみならず、時には深みのようなものさえ感ずることがあるのも、あなたがち教師稼業で学生の直訳ばかりに責められてきたせいではないと、自分では思っている。深み、というのも、そこに日本語としての作用だけではなく、その背景にあるフランス語の文章の構造や言い回しの妙が透いて見えるような気がするからであろう。言語という同じ道具ではありながら、日本語とフランス語は同時に成立することは不可能である。その点で、新奇なハーモニーを求めて尺八とヴァイオリンの合奏を試みることもできる音楽の道具、つまり楽器とは根本的に異なるものだ。しかしその不可能なはずの共生が、ある稀な瞬間に成立することがあるとしたら、その枠組となるのが例の直訳体と呼ばれるいびつな日本語なのではないか。だがそうだった時、日本語はそれ自体で日本語とは言えないものになっていることも事実である。

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

ペカリと剥がれ落ちるのではないと思うほどに厚化粧の日本語か、あるいはまた日本語としての実体を失ってしまって、その内部にある、いやその遙か向こうにあるフランス語の骨組を透かして見せるだけのガラスのような日本語か、翻訳の文章はいつもこの両極端の危険に挟まれているのではないだろうか。そしてその危険は、単に訳文にのみつきまとうのではなく、母国語の他にもうひとつ別の言語に精神的体重の一端をかけてしまった者の言語全体をおびやかすものであるように思うのだ。ひとの書いた訳文を好きというのも嫌いだ、他でもないこの私自身が、その嫌悪と批判の刃を自分に向けてはいられないからなのである。フランス語を学ぶことで、結局は日本語を失ってしまったのではないかと私が言うのは、つまりそういうことである。

日本語とフランス語の双方に足をかけて、その二つの大地で自分自身をよりしっかりと支えるつもりでいたのに、いつか私という小舟は岸を遠く離れている。眼の下に、というか自分の内に、思いはどこまでも透明に深まって

いく、そのような感じは今もあるのだが、感じばかりで、それを掴み取るための言葉という器がない。舟底の抜けた舟は、器にも支えにもなり切れず、それなのにどうしてかいつまでも浮いているのは、多分この小舟、自分の力では沈むこともできない程に浮薄なしろものだからだろう。

何事によらず、思いの深みを語るといのは難しい。そんなわけで、緑なす二つの陸地の間に刻まれた峡谷に宙吊りになっている、そんな思いを語りたいと思うのに、私がするのはいつも訳文という掛け橋をあげつらうことではない。本当は翻訳などどうでも良いと思っているというのに。

身の危険を冒して水辺で奇妙な失墜に悩むよりは、いっそ足元の地面を掘って地中に身を埋めた方が、同じ身を亡ぼすにしても幾らか心底定まるのではあるまいか。

闇雲に日本の古典を読みたいと思ったのは、拡散と光を求めていた心が、今度はその反動で闇へ収斂することを願ったようなもので、向学心といった華々しいものではないさきかもしれない。わからないならわからないで、一向に構

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

わなかった。わからないもの、臆ろなものに対するそれはそれなりの身の処し方にはもう慣れている。ただ、この細い蔓をずっと手繰っていけば、何も探り当てることはできず、ただ途方に暮れるばかりかもしれないけれども、それでもいずれ地続きには違ひなからうという、怠惰な安心感があった。

そしてまた、本当の作品にしかない、何とも言い難い全き感覚にも出会えて、こればかりはフランスの文学から得ることのできた最良の瞬間と変るところがない。空間的に、あるいは時間的に如何に隔たっていようと、良い作品はそれのみで充足し、そのなかにある自分自身が限りなく自由で安定している。それがフランス語であっても古文であっても、この点ばかりは同じだった。わかりにくい可否かは二の次で、つまりどちらの場合も、訳文や訳註などといった、脇から割って入って解釈しようとする者の存在は、本当は無用なのかもしれない。

その古典の訳註といわれるものに関して、私は不思議な経験をした。

同じ日本語とはいいながら、古い時代のことばは実にわからないものがある。驚いてしまうことが多々ある。それでもことばの持つ、言うなれば無言

の力というのはたいしたもので、変な言い方だけれど、時に、わからないのにそれでもわかってしまうということがあって、この方が更なる驚きであった。ひよっとすると、ある種の言葉にとつて、「理解する」ということや「明解である」ということは、思ったほどに重要ではないのかもしれないと、そんなことまで考えたけれども、こうしたことは私はすでにフランス語で、その後には幼児と会話で経験したことであつたので、さほどおかしいとは思わなかった。

おかしいのは訳註と呼ばれる現代語の方で、これには始めから抱腹絶倒の思いをした。先に述べたような理由から、できる限り読まないようにしているのだが、それでも何となく不安だったりして、ついチラチラと盗み見をする。すると、たとえばこんなことが書いてある。

「子供を思う情愛は、諦めもつく故、限度があるものであつた。然るに臆月夜の、このように思いつめて悲しがつておりなされた夫婦の別

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

れの方が、限度がなくて、こらえ難くまあ、あるなあ。」

江戸の敵を長崎で、などというつもりは更々ないが、これは何ともすさまじい日本語ではないか。それも現代文だというのだから、あきれてしまう。いったいこれを書いた人の言語感覚はどうなっているのだろうか。

これは『源氏物語』の「若菜上」の校注で、朱雀院が娘の女三宮の行末を案じつつ出家する際、側室の朧月夜が悲しみに沈んだようすで傍にじっと付きそっているのを見ての院の述懐である。本文は、たとえば、

子を思ふ道は、かぎりありけり。かく思ひ染み給へる別（れ）の、堪へがたくもあるかな。

というのだが、こちらの方が素直なのはもちろん、ずっと平明なようにさえ思われる。第一、朱雀院ともあろう人が、こうした状況で「…あったつけ」とは何事だ。

しかし一旦そう思ったあとで、私はまた考えを改めた。このことばは日本語であって日本語でない。というよりは、このことばであってしかもこのことばではないのだ。つまり現代ではもはや通用しないことばに身を浸し、そのなかで思念をも情感をもふくれ上らせたあとで、さてこれを誰にでもわかる現代の用語に直そうとしたところが、どうもピタリと来る言い回しがない。

「…けり」にしても、「…かな」にしても、それをうまく表現してくれることばがどうにも見つからなくて、強いて言えば、「…だったつけ」とか、「…だなあ」とか言うときの、あの感じだと思うのだが、しかしこのことばが必ずしも相応しいものでないことは重々承知している。承知はしているが、しかし原文の一言一句が持っている細やかな感じを言い表わしたいと思えば、いずれこの世に存在していることばを利用するは他ないのだから、多少おかしいようでもそれに頼るしかない。それをしないことには、原文の中の最も微妙な、最も美しい部分を切り捨てなければならなくなる。それは確かに、ふつうの耳触りのいい日本語に直せば、それ自体ではわかり易く、良い文章に

ことばの狭間 よまいごと ~四十歳の間奏曲~

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

なるかもしれないけれども、そういう文章は原文の流れを無視し、その中にある思考や感情の動きを殺して、原文と無関係なところに成立したものでしかない。

そこで大いに工夫して、何とも奇妙な現代語訳を作り上げる。だが、奇妙とは言っても、書いた本人はその奇妙さをさほど意識していないのではあるまいか。と言うのは、この訳文を書きながら、その人の脳裡を流れているのはその文章ではなくて、その向うにある原文だからである。その原文の波に心地良く揺られて、その眼は、いわば夢遊病者のように、現に眼の前にある文章を通り越しているのである。見ていながら見てはいない。つまりこの現代語訳は、ある意味で存在していないのである。

だからこの校注者が、たとえば庭先に咲き乱れる花に関して次のようなたわごとを言ったとしても、決してそれを今流行の女子高校生ばりの冗談かと疑ってはいけない。

山吹は、上品に咲こうなどは、もくろまないものであった花であろうか。

全くどうも興味のある花なのであったつけ。

冗談どころか、考えようではこれほど真面目な文章はないとも言えるのだが、しかし冗談としても立派に有効価値を持つているし、それにまた、これを利用して極めてオリジナルな文体を創り出すこともできそうではないか。私はいつの間にか『源氏物語』の校注を単独に読むという遊びが気に入ってしまった。変にしかつめらしくなってしまうた頭の働きを一挙に攪拌してくれるという優れた効能があるから、ぜひ一度お試しあれ。

校注などといった付随的なものに妙にこだわらずにいられないというのも、この文章が私にとって他人事のようにには思えないからだだろう。完結した文章をもうひとつ別の言語に移し変えようとする時の頭のねじれと心の揺れは、フランス語と日本語の間を行きつ戻りつする時の私と同じだ。そしてそのあげく、現に生きている自分の支えであるべき唯一の言語をいつの間にか見失ってしまうという空ろな悲哀は、これはもう『源氏』の校注者のものである。

ことばの狭間 よまいごと ～四十歳の間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —

よりは、私自身のものである。ことばというものは、そこに光や影、味や香りがあればあるだけ、かえって人を思いもかけぬ袋小路に追い込んでしまう、何とも奇妙なしろものである。

それにしても、私が失ったことばとは、いったい何だったのだろうか。二十年前、舟底を外して覗き見たものが実はフランス文学そのものではなかったかもしれない、それと同じように、いま私が喪失感に悩んでいるものも、本当は日本語ともことばとも違う別の何かなのかもしれない。本当はその何かをこそ探し出し、つきとめるべきなのだろうけれど、それをせずに私は、よじれたことばを手繰りながら、無気力にじつとうずくまっているばかりである。そんな身を亡ぼすようなことをしていないで、すぐにも舟底を作りなさい、棧橋をかけなさい、それが駄目ならせめてのことに、泳ぎの腕を磨きなさいと、そう励ます声は私の内からも外からも聞こえてこないではないのだけれど、それよりは、この喪失の行きつく果てがどうなるのか、そちらの方が心に懸かって、身動きがならないのである。

(初出一九八五年 「ふらんす手帖」14号)

ことばの狭間 ～四十歳の^{よまいごと}間奏曲～

— 日本の小説・フランスの小説 3 —